

山口西鶴の復権

——読みの姿勢をめぐって——

山口剛先生の広大な学問の世界の中で、西鶴研究は、その一隅を占めているにすぎない。と同時に、先生逝いてすでに五十年余、その後の西鶴研究の隆盛は、一見山口西鶴をしてその顔色なからしむるほどの段階にまで来ているかのごとくであり、今さら山口西鶴の復権でもあるまい、という声が私の耳もとで聞えぬわけでもない。山口先生の学問は、むしろ西鶴研究以外の分野で、現在まで多大な影響を与え続け、その発想や方法が正統的に継承され、すぐれた成果を数多く生んでいるのではないか——それが衆目の一致するところである以上、山口学の本領をうかがうためには、それらを取りあげる方が賢明であるようにも思わぬではない。が、歿後現在まで、正統であり続けているものを、その元祖として祭り上げてみても、さしたる意味はないだろう。その発想や方法を正當として継承して行けばいいだけの話であり、今その意義を論ずるには及ぶまい。問題は、一見乗り越えられてしまったかに見えるものの方に存する。その発想や方法は、はたしてどの程度に、あるいはどのように乗り越えられたのか。その真意を十

谷 協 理 史

分に解した上でそれが行なわれたのかどうか。

もちろん、山口西鶴、すなわち、山口先生のとらえた西鶴のイメージ、その発想や方法に関する論が、現在の西鶴研究に影響を与えていないわけではない。その主張を割引きされたり、時には拡大・補強されたりしつつ、生かされている点も少なくはない。

また、言葉を変えてはいても、その真意を生かそうとしていると見られる論も現在見うけられないではない。この小文で触れる余裕はないが、山口先生の行なわれた指摘の中で、現在定説とも云うべき存在になっている点は少くないのである。したがって、西鶴研究の進展が、山口西鶴の中からとるべきものをとり、捨てるべきものを捨てて来たのだ、という見方も当然ありえよう。また、ここ五十余年に発掘・紹介された資料は少なからず、それによって山口西鶴の誤りを認めざるをえない部分、おぎなわねばならない部分も少しとしないことは確実なのである。

にもかかわらず、私は今、山口西鶴の復権を云おうとし、それは乗り越えられているのか、という問を提出しようとする。何に

よってであるか。

事は、西鶴とその作品をとらえる姿勢、その読みの方向のみにかわる。新資料の出現による事実の確認によって決着のつく問題は、今とりあげるを要さない。また、これまでにもその点は、すでに論じられて正誤は明らかであるようにも見うけられる。問題は、あくまでも山口西鶴の読みの方向が、現在、新たな意味を持ちうるか否か、であり、もし意味あるとすれば、それをどう復権すべきかということである。

西鶴をどうとらえるか、その作品をどう読むかという視点を問題としつつ、大正期から現代までの研究史を省る時、山口西鶴は、西鶴全体を押える上で、すこぶる孤立しているかのように見うけられる。山口西鶴は、西鶴の近代性などは論じようとせず、そのリ、アリズムを強調することを意識的にさけつつ、その俳諧性のみを主張しているかのごとくであり、作家として作品を書くことに成長して行くといった視点を排して、作品の推移と変化にと注目する姿勢を打ち出している。また、作品がもとづく事実の探索よりは、その文体や古典のもじりに格別の注意をはらい、虚を導入することによる笑いの存在を強調し、深刻に、生真面目に読もうとする姿勢を意図的に斥けようとしているがごときなのである。

西鶴研究史・批評史をここで詳述する余裕はないが、右のような山口西鶴への私のとらえ方が正しいとすれば、それは、自然主義系の批評家や作家たちの評言とも、その流れをつぐ片岡良一氏の視点とも、山口先生歿後の暉峻西鶴・野間西鶴とも、あるい

はその所説を継承するように見うけられる現在の諸論とも、大きなへだたりがあることは一見明らかである。山口西鶴の基本的な視点は、研究史を見るかぎり孤立している、少なくとも片寄せられて来ているという印象はぬぐいがたいのである。山口西鶴は、奇説にすぎなかったのだからか。それとも、先生の早逝が、その説の真意をより具体化する時間を与えなかったがために、十分の理解を得られるまでに至らなかったのだからか。あるいは、先覚者の悲哀を味っているにすぎないのか。

山口先生の最初の論文ともいうべき「西鶴の『好色一代男』の成立」が発表せられたのは、「早稲田文学」の大正十一年三月号である。俳諧性を中心に、『一代男』成立の文学史的背景を論ずるのはもとよりのこと、社会経済史・文化史的な背景を多面的に押え、『二代男』の誕生とその意義を縦横に解き明かしたのが、この論文であり、当時の研究水準をはるかに抜きこんでた穩当な論であることは、すでに定評のあるところである。そこにおいて、山口西鶴のありようは少しく感得できるが、その鋭鋒は、なお十分にあらわではないように見うけられる。

山口西鶴が全貌を現すのは、いうまでもなく、新潮社刊『日本文学講座』の「西鶴好色本研究一―三」（昭和二年十二月、同三年一、三月）、『好色一代男』考一、二（文学思想研究・九、十一号、昭和四年六月、同五年六月）であり、とりわけ『西鶴名作集・下』（日本名著全集江戸文芸之部第二巻・昭和四年十月）解説においてである。以下、それらを中心としながら、山口西鶴の西鶴像や読みの姿勢を具体的にとりあげ、そのような説をなした

山口先生の本音を聞きとり、山口西鶴が現代の西鶴研究に持つ意味を問題にして行くことにしたい。

論文の書き方が現在とは違っている以上当り前と云われてしまえばそれまでだが、山口先生は、その数多くの論考の中で、その時点までの批評や研究に触れることがほとんどない。真山青果の西鶴江戸居住説に穏やかな疑問を呈する一例あるのみといっている程である。そこでは、現在の西鶴研究史で重視される島村抱月の諸論にも、田山花袋や正宗白鳥の批評にも、その後の研究の方向に大きく影響を与えたと思われる片岡良一の『井原西鶴』や阿部次郎の『好色一代男おぼえがき』などにも、いっさい触れようとはしない。おそらくは、他人の論をあげつらった後にささやかな自説を主張するという当世風の野暮な行き方を避け、自らの主張のみを前面に打ち出すことで「知る人は知るぞかし」と微笑する粋なやり方を選んだのだろう。あるいは、日本の近代小説や西欧の文学観を尺度として西鶴の価値を論ずる批評や研究を、とり上げて論破するに足らぬものとして黙殺していたのかもしれない。山口先生は、大正から昭和初期の文学観を前提とする西鶴理解のあり方を熟知していながらも、それらを難ずる野暮をおかすことなく、敢然と正反対の意見を、時にはあえて誇大に強調しつつ打ち出して行っているようなのである。

片岡良一氏の『井原西鶴』（大正十五年三月刊）は、明治から大正期までの西鶴評価を集大成し、西鶴の作家としての成長を論じつつ多様な作品が生まれる必然を論証していると見られるもの

である。それは、「自然主義的な西鶴観につながる研究」（『研究史大成西鶴』研究史通観）であり、同時に大正期の人格主義・教養主義の人間観・文学観をも色濃く反映していると思われるが、そのさっそうとした論の展開が、その後の西鶴理解に大きな影響を与えていることは周知である。

しかし、山口先生は、作品ごとに西鶴内部での創作の必然を論じ、書くことによって文学者として高みに登って行くといった西鶴のイメージを、いとも簡単に斥けてしまう。

西鶴が浮世草子に筆を執りはじめた時、もう人生に対する考へ方は熟してゐた。四十一歳から五十二歳まで、その作の相は変るとも、貫くものに、さまでの変化はない。変化は、みづからの興を対象すると共に、また読者の興を眼目とすることによって起る。（『西鶴名作集下』解説 傍点筆者、以下同じ）さらに云う。

西鶴はなほ七めぐりの井戸のやうなものであらうか。水を求むる心ははじめから決してある。一めぐり、一めぐり、さて清きを汲む。西鶴の人生に対する見解は、すべて『一代男』に決定している。視野はすでに限定されて、後のものは、つぎつぎに視点をかへるにすぎない。視点をかへることによって、視野は広まらないが、視る眼は一事一物をのこさない。そこに彼の成長と変化があった。（同右）

山口西鶴の西鶴理解の前提は右のごとくである。「さまでの変化はない」といい、「成長と変化」というように、西鶴の成長を全く認めていないわけではないようであるが、「みづからの興」

と「読者の興」とを對象として「その作の相」を変えているにすぎないという主張は、歴然としている。「二代男」から『置土産』へと変化する西鶴の必然を分析する必然性を山口西鶴は認めず、作者と読者の「興」の相関に西鶴の変化を見ようとし、『二代男』をもっとも重要な作品として位置づけるのである。これが、「明治・大正の西鶴研究の総決算」といっても過言ではない（前出・研究史通観）片岡氏の研究、その流れをつぐ昭和期の研究、あるいは現在通説化している西鶴のイメージと、あまりにもかけはなれているものであることは、論証を要さないであらう。

かくて、山口西鶴は、「その作の相」を具体的に論じて行くわけだが、まず、その作品の読みの基本的な姿勢を問題にし、次に、具体的な二、三の論点をとりあげるといふ方向で論をすすめて行きたい。

山口先生の読みの出発点には、西鶴が当時の読者の興をどのように魅こうとしているか、それはどのような方法であるのか、という問題意識が強烈にあるように見うけられる。と同時に、それは現代の読者、すなわち当世の研究・批評のとらえる「興」や方法とは違うという認識がある。描かれたものを事実ととらえ、写実に感嘆し、人生の悲哀などを読み込む現代の読者の読みは、西鶴当時の読みではありえないという前提から、山口西鶴は、西鶴の方法に執着し続けているのである。山口先生は、「虚実皮肉の間」（『西鶴・成美・一茶』所収）で、当時の読者の読みを概括し、現代の読者の読みを皮肉っている。

おもふに西鶴は、かつて俳諧の一座に参ずる者が、すべて、その昼、その夜の気分を同じうするが如く、一部の浮世草子を中にして、作者の肚を理解し得る読者のあることを期待したのであらう。

多くの場合に、西鶴は個々の事象の描写に於いて、実を以てし、その配列に於いて虚を以てする。また、個々の事象に実を以て充てながら、その一部に虚を残す。たとへば、事と処に実があれば、人に虚があり、人と事とに実があれば、処に虚のあるが如きである。もとの事実を悉く知らぬ者は、読んで悉く信じ、その中の一虚事を見出したものは、他の事実に対して、軽い疑ひを有つ。信すべきか、信すべからざるか、その惑ひの中に、をかしさ、面白さを味ふのであった。当時の有識の読者には、かういふ感を抱くものが多かったであらう。

時の隔りは、西鶴の虚実を全く混淆させてしまった。今は、多く、西鶴の筆を信じて、書かれたものを、みながらに実とのみおもはせる。作意を露はに見せなかつた町人物になると一段とさうである。西鶴が猶ゐたならば今の読者にどんな苦笑を以て対するか。推測するに難くない。

山口西鶴は、右に見られるように、「当時の有識の読者」はどいう読んでいたかという点のみに関心を払う。「今の読者」の読みは、間違っており、西鶴を苦笑させるだけだろうと皮肉を飛ばす。西鶴に託し「今の読者はその本当の面白さを少しも解っていないんだ」という山口先生の微苦笑が背後にあることは、「推測するに難くない」のである。

ところで、現在、「当時の有識の読者」の読みで作品を読むという姿勢は、定着しつつあるように見える。山口先生が、西鶴の場合以外でも貫ぬいたその姿勢は、最も有効な読みの方法として、とりわけ西鶴以外の近世文学研究の分野で定着している。時に「今の読者」の読みが提出されることがあっても、大きな意味を持ちえた例は少なく、前述のように山口先生の姿勢や方法は、現在まで正統として継承され続けて来ているのである。にもかかわらず、なぜ西鶴の場合のみ（あるいは芭蕉や蕪村もそうだったかもしれないが）山口先生の姿勢や方法が当時孤立してしまっただのか。また、その死後も現在まで、孤立とまではいわないにしても、少くとも片寄せられるような状況を生んでいるのか。

答は、一見明らかである。「今の読者」の文学観や価値観の尺度にあらう部分を西鶴が多分に持っており、その立場からの読みで読んでも「今の読者」を納得させるに足るものを十分に持っているからである。それでいいのだという立場、「当時の有識の読者」の読みなどといってもどこかで「今の読者」の読みを生かして理屈をつけているにすぎないという批判、「今の読者」に面白くなければ研究する意味がないではないかという意見等々があること、それらが一応正当な一面を持つことを、私は否定しない。自覚的であったか否かを問わず、その立場を正当と考える人が多かったからこそ、山口西鶴は片寄せられて来たのである。

しかし、かつての山口先生がそうであったように、現在の西鶴研究においても、それでいいのか、少くともそれだけ、いいのか、という反撥は当然生まれていいはずである。そしてその反撥

は、まず、「当時の有識の読者」の読みを明らかにしなければ、作品の一部を解ったつもりになるだけの「今の読者」の思い入れが先行するのみ、西鶴に近・現代文学の類似品を発見するのみに終ってしまっているのではないのか、それでは西鶴を読む意味もなく、西鶴の本領をとらえることもできないのではないのか、という反批判へとつながるであらう。

昭和初年の山口先生は、「今の読者」の読みを拒否し、右のような反批判の立場に固執し続け、その立場を作品論の中で具体化して行く。その立場、読みの姿勢は、当時のみならず、現在もなお新たな西鶴理解のために有効性を持っていると考えるが、以下、いくつかの具体的な問題を取りあげつつ、山口西鶴復権の可能性をうかがってみよう。

前引の一文にも見られるように、山口先生は、西鶴の実を認めていないわけではないが、かならず虚がまじっていることを強調する。一見当り前であり、穏当な主張である。が、虚実の相関をどう押さえ、それによって「ををかしさ面白さ」をどのように読みとるかを基本とする先生の主張は、リアリスト西鶴、人間の真相を描く西鶴という当時の、あるいは現在までも中心となっている西鶴論を対置した時、まさに対照的となる。しかも先生は、その論考の多くで、「今の読者」に注目され評価される実の部分には、おそらく意識的に目をつぶり、虚の部分の解明のみにその努力を傾注する。山口西鶴といえど、『源氏』その他の古典の翻案を中心として俳諧性を誇大化した論と受けとられかねない程の奮闘ぶ

りを示すのである。

何故そうしたのか。先生は、「今の読者」の読みが、余りにも西鶴の一面のみを誇大視していると考え、その読みと意識的に対決した読みを提出しようとしているのではないか。それは、穩当な西鶴の『好色一代男』の成立」と、その五年後の執筆である「西鶴好色本研究」の『一代男』論とを対比すれば、一読明らかとなるだろう。

前者では、『源氏』の翻案を指摘しつつも、『伊勢』や『浮世物語』との関連、談林俳諧の特性とそれが『一代男』に持つ意味、遊女評判記などの摂取等々にも十分目を配って論を立てている。

が、後者では、虚の部分のみをあえて強調する。『伊勢』・謡曲などの翻案を一部で記しはするものの、いささか強引とも見えるほどに『源氏』の翻案たることを強調し、数多くの例示を行なった後で、ついに、

『一代男』を通じて五十四話、最後の「床の賣道具」が巻の名のみある「雲隠」に仮託したのを除けば、『源氏』の本文に拠るものは五十三話である。

とまで結論するわけである。

もちろん山口先生は、右の結論を出す前にすべての章について触れておらず、その指摘に問題の残る所もなしとしない。島津久基氏「西鶴と古典文学——特に一代男と源氏物語との関係を中心として——」（『国語と国文学、昭和十四年十一月号』同十五年九月号、のち『国文学の新考察』所収）が検証するように、どう見ても右の結論は、いささか無理であるが、山口先生が、あえて無理を承知で右の結論を出した真意は、もはや明らかである。「今

の読者」の西鶴批評を横目でにらみつつ、『一代男』全体が『源氏』の翻案でもありうる、と主張することによって、当時の西鶴批評の近代主義をからかい呵呵大笑していたのではないか。それは、結論のすべてが認められるなどと考えて書かれているようではないのである。『諸艶大鏡』宇治十帖および『宇治拾遺』翻案説を論ずる「好色二代男考」と同じく、余裕を持って、時に斜に傾えて、こう見れば見られるではないか、と云っているように思われるのである。

もっとも、このような山口先生の真意は、『一代男』源氏翻案説を斥け、遊女評判記との関連と脱化を強調する「浮世草子の成立」（『国語国文・昭和十五年十一月・二月』、『西鶴新放』、『西鶴新新放』所収）の野間光辰氏もすでに感得しているところであり、山口先生の態度を評して、「江戸文学の大家であった山口氏は、そのこと（評判記の摂取・脱化等——筆者注）を十分承知の上で、とぼけた顔をして、或いは突き放して、なお『源氏』の翻案を云々せられたところに、心憎いものがあるやうに思はれる」と云われているのである。

しかし、野間氏の論のみの影響とは云えないにしても、その後『一代男』論や注釈書の中で、『源氏』翻案説は、極小なものとして困り込まれ、山口説の多くは片寄せられてしまう。その点については、すでに拙稿「『源氏物語』と西鶴——『好色一代男』を中心に——」（『文学・昭和五十七年七月号』）で一部について検証したが、果して『源氏』翻案説、あるいはそれを拡大した先行文芸翻案説は、『一代男』において現在考えられている程度に軽い

ものであっていいのだろうか。

山口先生は、「原拠を露はにし、転振のあとを明かにして、はじめて伝えられる興趣がある」(西鶴好色本研究)といい、その「転振」を通じて生まれる「興趣」が、いかに作品を豊かにしているか、「今の読者」の理解が作品をいかに瘦せ細ったものとして見ているかを明らかにすべく、『源氏』の翻案を意図的に強調したのである。それは、『源氏』の場合のみに限らず、先行文芸の翻案をいう場合のすべてに通じている。確かに、その一部には無理と見られるものも少くはない。しかし、改めて検証し直してみる必要のある部分も多いのではないか。

と同時に、山口先生の真意を生かそうとする立場から云えば、その「転振」による「興趣」を『源氏』のみならず種々の先行文芸との関連において重視することの方が、現在より重要であるように思える。現在、山口先生の云う「興趣」がどの程度に押えられ、その作品を豊かなものとして読む方向が確立していると云えるのか。私は、具体的な一例を『一代男』巻一の一にとり、前出拙論でこの問題に触れたが、この点は現在まだ、十分な成果が数多く生まれる段階にまで来ているように思われない。『源氏』翻案説そのものではなく、それをあえて強調した山口先生の真意が十分に生きてはいないようなのである。山口西鶴復権のために、まず、その真意を生かす具体的論証を個々の作品について積み重ねて行くことが、現在特に必要とされているのではなからうか。

すでに触れたように、山口先生は、西鶴に実の面を認めているな

いわけではない。人が云いすぎる故にあまり云わないだけであり、人が重視せぬ故に虚を強調していたのである。しかし、山口先生以後、実の面は一層強調され、その方向での詮索は、一方で研究の進展とともに事実の探索を重視する方向が生まれ、一方でリファリスト西鶴の方法が近代性を持ったものと方向づけられて強固に論証されるようになって行く。「西鶴は嘘をつかない」という真山青果氏の方向での事実の探索と「作意を露はに見せなかった町人物」その他に、山口先生とは逆に近代的な作意を見てその方法を論ずる諸論とが、西鶴研究の中心的な潮流となり、現在に至っているように見うけられるのである。

もちろん、右の要約は、あまりに大雑把であると思うが、山口先生の虚を重視する姿勢が、その後まったく継承されていないわけではないにしても、かなり押え込まれてしまっていることは否定できない。これでいいのか、と、山口先生が「猶あたならば今の研究にどんな苦笑を以て対するか。推測するに難くない」状況が現在ないわけではないのである。

確かに事実の探索は大事である。しかし、書いてあることを事実とする前提に問題はないのかどうか。山口先生は、「事と処に実があれば、人に虚があり、人と事に実があれば、処に虚のあるが如く」と、事実そのままといった書き方を西鶴がしていないことを強調する。そして多くの研究者は現在、その点を云うまでもなく承認している。しかし、いざ事実探索を行なうとなると、思いの外書かれていることを事実とする前提でその原拠を探索し、事実に近いと読む姿勢が強く存しているのではない

か。一例のみをあげる。

岩波文庫本『武道伝来記』の前田金五郎氏注は、博搜をきわめたすぐれた注である。が、その注釈の基本姿勢は、西鶴の書く時・所・人・事が一応事実に基づくとして博搜されているように見うけられる。しかし、西鶴は、「事と処に実があれば、人に虚があり、人と事に実があれば処に虚」があるばかりか、時を虚とし、実を意図的に虚として『武道伝来記』を書いていくがとくなのである。その点については、別稿『武道伝来記』論序説——読みの姿勢をめぐって（文学・昭和五十八年八月）で詳述したので触れないが、もし私の推定が正しいとすれば、書かれたことを事実とする前提で行なわれる注や読みの多くは、誤解を生むのみという結果になりかねないであろう。西鶴の虚をどう押えて行くかは、と同時に、虚を重視して行く方向は、現在、西鶴の「をかしさ面白さ」を考える上で、十分に生かされなければならない重要な課題であり、すべての作品に共通した問題なのである。

その意味で、「作意を露はに見せなかった町人物」という山口先生が、町人物の作意をどのようにとらえていたかを十分に聞くことができないのは残念である。

西鶴は見聞の正しきをそのまま伝へると共に、精しからぬ筋には虚を以て補ふ。虚を实と見紛らす場合もあった。虚を虚としてをかしさに資する場合もあった。それがすべて俳諧の興趣であった。（『西鶴名作集下』解説）

と、町人物の作意を結論しているごとくであり、「興は現在に過去を混じ、現実に非現実を配することによって、はじめて繋かれ

た」（同上）なども論じているが、虚実の関係を具体的に個々の作品を通して論じている部分があまりに少く、その読みを十全に知ることはできない。「今の読者の心を以て、その頃の読者の心を考えることは難い」（同上）と云う以上、町人物の虚を重視しており、その現実性を論ずる「今の読者」と対立するものであったことは明らかだが、それではその虚をどう押え、実とどう関連させて作意をとらえ、どのような興を見出すべきなのか。

私は今、山口先生の町人物への読みの姿勢が、現実性を強調する現在の読みを超えるために有効なものと確信している。が、虚のありようは、当面個々の章の具体的な検討を通して考えるより仕方がないように思える。町人物の読みの姿勢が固定してしまっているように思われる現在、山口先生の示唆をどう生かすかは、私自身にとっても今後の問題ということになりそうである。

山口先生は、すでに見て来たように、「当時の有識の読者」がどのような興を得たか、すなわちどのような「をかしさ面白さを味」わったかを、常に問題にする。それが、人生の悲哀を感じとり人間の真実を読みとろうとする「今の読者」を意識した発言であることはいうまでもないが、はたして現在、そのような西鶴のとらえ方に有効性はないのかどうか。

あえて云えば、私は、現在なお、否、山口先生の時以上に、右の発言は現在有効性を持つと考える。試みにいくつかの作品に対する現代の読みを思い浮べてみればいい。

『一代男』世之介は実は流刑の島八丈島である女護の島へと逃

げのびたとする批評、新興町人階層の青春の讃歌、あるいは逆にその可能性の挫折といった評が、山口先生以後には、さまざまと併存している。『好色五人女』には封建時代の女性の悲劇が読みこまれ、『本朝二十不孝』には談理が説かれたり、將軍綱吉へのアイロニーが感じられたりする。『日本永代蔵』は談理の書と読まれ、『世間胸算用』は集約的リアリズムを眼目として読まれている。

西鶴には「をかしさ面白さ」はないのか。西鶴は、もっと「をかし」く面白く読むべきではないのか。あるいは、「今の読者」は、仮に面白おかしく読しても、それでは批評や作品論にならぬと思い込み、つい勿体らしくもっともらしく、いわば「古文真宝に構へて」しまっているだけなのか。

私は、山口先生の云うように、「をかしさ面白さ」をより鋭く感得しつつ、西鶴は読まれるべきだと思う。西鶴には、「今の読者」である私にも十二分に「をかしさ面白さ」があるのである。では、それをどのように解明して行ったらよいのか。

山口流に、西鶴の手法に格別の関心を持つこと、近代小説風の主題を求めて西鶴を読む姿勢を排し「当時の有識の読者」の読みを明らかにすること、各作品での虚実のありようを当面具体化してみること、表現の特色を明らかに当時の一般語の語感をより綿密にとらえること、等々、進むべき道は少なくないようだが、具体的には、個々の作品に即しつつ、その興のありようを見きわめ、「をかしさ面白さ」を生む作意をとらえ、説得力を持った批評を生み出して行く以外にはないであろう。山口西鶴の復権には、時にそれが具体的な論究を欠く部分を持つ以上当然ながら、その真意を生かしてのより綿密・詳細な作品の読みが要請されているの

である。が、それが十分に実現できるか否かは、これ又、今後の課題としかいいようがない。

これまで、山口西鶴のいくつかの側面をとりあげつつその復権の可能性を見て来たが、制限枚数を超えてしまった今、比較的大きな問題につながる以上の諸点をとりあげるのみで、筆を置かざるをえないようである。しかし、右の外にも山口西鶴には、個々の細かな問題で示唆に富む指摘が少なくない。例えば、『万の文反古』擬作説が中村幸彦氏『万の文反古』の諸問題（『近世作家研究』）に示唆を与え、『遊仙窟』の用字使用の問題が暉峻康隆先生の『男色大鑑』の成立（『西鶴新論』所収）に生かされているごとく、山口先生の指摘が何らかの意味を持つ場合は多いのである。とりわけ、その粹な書きぶりは、くだ／＼しい論証をあえて避けているようだから、読みようによつては、すこぶる暗示的であり、読む側の問題意識の持ちちようによつては、多様な可能性をはらんでいるように見うけられる。山口西鶴の復権は、今、企てられてしかるべきなのである。

もっとも、こんなことを云えば、おそらく山口先生は、「あんまり野暮は云うな。研究なんて楽しんでやればいいんだ」というにちがいない。しかし、野暮を承知でやるしかないのが研究というものでもあろう。私は、

井原西鶴に就いてもものいふのは易い。いうて正しきを得るのは難い。（『西鶴名作集下』解説）

という山口先生の言葉を耳もとに響かせつつ、野暮な方向へとのめりこんで行くより致し方がないようである。